

新資料の翻刻と考察

堀秀成『大教本論』（古河市立古河歴史博物館蔵）

——伊勢神宮から金刀比羅宮への転地理由をめぐる——

錦

仁

はじめに

『大教本論』は、明治十年代に活躍した国学者・神道家で長く教導職にあった堀秀成（一八一九～一八八七）の著書である。国家の基礎たる神道（国家神道）とはいかなるものか、いかにあるべきかを論じている。全文を翻刻し、内容を分析して、執筆に至った理由を考察しようと思う。¹

結論を述べておくと、『大教本論』は、神宮教院の教導職もしくは神社神道を批判して書かれたと思われる。秀成は明治三年、五十一歳で明治新政府の「宣教大講義生」に登用された。しかし、すでに高齢であり、地方の小藩（古河藩。茨城県）の出身でもあり、その後の人生は必ずしも順調ではなかった。希望を抱いて新政府に出仕したものの、なかなか時代の波に乗れず、思うように立身出世できなかった。学識が深く、狷介な性格であることも不利な状況を招く原因であったようだ。

秀成の同僚には、福羽美静（一八三一～一九〇七）、三島通庸（一八三五～八八）などがいた。福羽は津和野

藩の出身で、新政府の神祇政策を推進し、明治天皇に『古事記』の進講をした。神祇官の大副であったころ、秀成と特に親しく付き合った仲だった。⁽²⁾ また、三島は薩摩藩の出身で、のちに山形県令・福島県令などを歴任し、東北地方の道路開発に功績を残した。かれが教部省に勤務していたころ、秀成と親しかった。⁽³⁾ このような親しい同僚に追い越され、差を付けられ、取り残されてゆく、という人生を秀成は送ったといっても過言ではない。

秀成は明治三年三月、千葉県野田市に在住のまま宣教大講義生に任用され、七月に少博士に昇進。減員のため十二月に権少博士にもどったが、命により『神魂演義』『神魂論』等を著して献上した。四年十二月、出京を命じられて宣教係となり、全国から応募してくる教導職の選考にあたった。教導職とは、あとで詳しく述べるが、国民を啓蒙するため各地で人々に講義をする者たちのことで、神官と僧侶から選ばれた。五年正月三日、秀成は天皇の御前で「神武紀」を講じる機会を与えられ、権判官の小野述道を通じて称誉をたまわった。三月に神祇省が廃されたが、教部省に移管された大教院の大講義となり、翌六年三月、その講師長となった。しかし、国政の変更により明治八年五月に大教院は廃止され、神道側は事務局を伊勢神宮に移して独自の大教宣布を始めた。秀成は東京在住のまま伊勢神宮の禰宜に任じられ、やがて講師長になった。明治十年五月、学習院語学教示を兼務し、その開院に際し、明治天皇の祖母である太后宮雅子に「皇国語法ノ総論」を進講した。秀成の絶頂期といえよう。英国公使館員として来日したウィリアム・ジョージ・アストン（一八四一―一九二一）に日本語文法を教えた。その学説は、英国公使のアーネスト・メイソン・サトウ（一八四三―一九二九）の尊重するところであった。

また、森鷗外（一八六二―一九二二）は明治四十一年六月から七月にかけて文部省で開かれた臨時仮名遣調査委員会で行なった演説の中で、堀秀成について次のように言及している。「本居先生が今在ツタナラバ、必ズ

や國民に假名遣ヲ教ヘヨウトシタダラウト思ヒマス、本居先生ノミナラズ堀秀成先生ノ如キモ、是レハ死ナレテカラ間モアリマセヌケレドモ、若シ今日居ラレタラ矢張假名遣ヲ國民ニ行ハウトシタデアラウト思フ」（『假名遣意見』、『森鷗外全集』第二六卷所収。立石尚之氏の教示による）。死後二十年も経っていたが、堀秀成の学説は高く評価されていたのである。

自筆年譜に記された生涯の入門者は、総計二千四百一人。教導職として大教宣布に尽くし、かつ全国に知られた権威のある国学者であった。

明治十一年六月、多忙な講師長を辞し、半年後の十二月に伊勢に赴き神宮教院に勤めた。多忙な仕事から解放され秀成の著作は進んだが、三年ほどして大きな出来事に遭遇した。明治十四年四月から心臓病に苦しむようになったこと、もう一つは明治十五年五月、伊勢神宮に辞表を提出し、香川県の金刀比羅宮に身を寄せたことである。⁴金刀比羅宮の宮司、深見速雄（一八四一―九二）の「明道学校の教授としてきてくれまいか」という招聘に応えたというが、⁵心中には挫折・落魄の思いがあったろう。

金刀比羅宮に身を移したのは、何か大きな理由があったに違いない。前年の明治十四年六月に著した『大教本論』に、それは隠されている。辞職を決意した表向きの理由は心臓病であろう。自筆の『公私日記 明治十四年従一月至十二月』（学習院大学図書館）を見ると、『大教本論』の完成から約二十日後の七月六日条に、神宮教院に提出した辞職願の下書きが記されており、「本年春以来、心臓病に罹り…」とある。しかし真相は、伊勢神宮の教導職および神社神道を真っ向から批判せざるを得なくなり、それが原因で辞職を決意したと思われる。心臓病はストレスによるものだろう。その「蓄憤」を晴らすべく、長年の持論である独自の神道論を『大教本論』に吐露したと考えられる。⁶

ちなみに、辞職願を提出したときの神宮教院の管長は、田中頼庸（一八三六―九七）である。かれは明治十

二年に神宮宮司から神道事務局の副管長となり、明治十五年に神道神宮の教管長になった。かれは神道事務局の神殿に祀る神々をめぐる、造化三神のとともに「幽界」の支配者であるオホクニヌシノミコトも祀るべしとする出雲派の千家尊福センゲタカトミ（一八四五―一九一八）らと大論争し、結局、勅裁を仰ぐことになり、頼庸の主張どおりアマテラスオホカミを祀ることに決着した。伊勢派の勝利に終わったものの、神宮内部には出雲派に賛同する者もいて大きく揺れていた。

秀成の辞職願は、管長の田中頼庸ではなく管長代理の落合直亮なおあき（一八二八―一八九四）に出された。直亮は秀成の二度目の妻の兄である。万延元年（一八六〇）その妹と結婚し、一子を儲け、四年後に離婚した。秀成四十一歳から四十五歳であった。ところで、直亮が伊勢神宮に着任したのは、秀成と同じく明治十一年。直亮は権中教正、秀成は権少教正だから、あきらかに上司として再会したわけだ。妹との離婚から十四年が過ぎたが、二人の間に気まずい感情はなかったであろうか。直亮は平田篤胤を信奉していたが、秀成は若いころに影響を受け、後に離れた（『秋田日記』）。辞職願は、持論を受け容れなかった管長の田中頼庸ではなく、奇しき縁によって再会した落合直亮に提出したのであった。なお、「あさ香社」を結成し短歌改良に功績のあった歌人・評論家、落合直文（一八六一―一九〇三）は秀成の門弟で、直亮の養子となり次女と結婚した。落合直克、直澄（一八四〇―一八九二）も門弟であり、秀成はこの一族と深い関係があった。

『大教本論』の検討——執筆動機

『大教本論』を綴じるにあたって、秀成は次のような跋文を書いている（傍線筆者）。これに注目しよう。

以上、述ル所ノ主意ハ、多年ノ持論ニシテ嚮むかニ神道管長ニ対シテ痛言陳述セシ事アレドモ、之ヲ容ラレザいれ

レバ、

思布事 （おもふこと） 伊波伝乃山尔 （いはでのやまに） 住加迈武 （すみかへむ） 門乃真清水 （かどのましみづ） 汲牟人母奈之 （くむひともし）

ト詠ジテ爾後、黙シテ云ハズ。唯同志ノ談話ニ蓄憤ヲ漏スコトアルノミナリシヲ、近日、故有テ其ナ中ノ二、三ヲ筆端ニ露セルニ至リテ、少シク鬱情ヲ慰ムノ快アリ。文辞ノ鄙ニシテ、且、不整ナルヲ咎ムル事ナク、聊、意ノアル所ヲ看ラレム事ヲ。

明治十四年六月

神宮教院の管長に「多年ノ持論」を申し述べたが、その「痛言陳述」を受け容れてもらえなかった。それで「同志」に「蓄憤」を漏らして我が心を慰めるばかりであったが、最近ある理由があつて「其ノ中ノ二、三」を書いてみたというのである。「思ふこといはでの山に住み替へむ門の真清水くむ人もなし」という歌は、（私の正論をだれも聴こうとしないので、山の奥に籠もつて何も語らずに過ぐすことにしよう）という意味である。金刀比羅宮への転居を示唆するものと見られる。

この跋文によれば、秀成の〈国家神道論〉は、伊勢神宮に拠点を置く神社神道と鋭く対立するものだった。神宮教院の管長および教導職の同僚たちとも鋭く対立したらしい。執筆の動機を「近日、故有テ」と述べているが、具体的には『大教本論』の結論ともいふべき最終章の「本教ハ宗教ニアラザルノ論」の頭書に記すように、「太教新報」第五十六号の「社説」を読んだことがきっかけであつた。この「社説」についての一節を適宜、句読点・濁点を付けて引用してみよう。

然ルニ、近日、太教新報第五十六号ノ社説ヲ読ミテ、始メテ愁眉ヲ開クノ感アリ。其説ニ曰ク、本年十二月十二日ノ勅諭ニ至テハ、煥然トシテ行政上ノ針路ヲ指示シ、温故知新ノ旨赴ヲ明示シ玉ヘルニ於テヤ。其旨、宛モ宣布大教勅書ト前後照応シ玉ヘル如シ。其勅諭ニ曰ク、我祖先我宗照臨シテ上ニアリ。遺烈ヲ

揚ゲ、洪模ヲ弘メ云々。宜ク今ニ及ンデ、謨訓ヲ明教シ、朝野臣民ニ公示スベシ云々ト。夫レ、我ガ皇論ヲ免レムヤ。商社其他ノ会社ハ、共立ノ為メニ設立スルモノニテ、一社ヲ結びテ、事業ヲ謀ルモノナルヲ、我大道ハ皇国三千五百万人ヲ一社会トセルモノニテ、別ニ一社ヲ結ベルハ、一派自立ノ主意アルモノニ似タリ。国家ノ政令ヲ講ルニ、何ンゾ一社会アル可キ理アラシヤ。宗教ニ於ルハ、其ノ教方ニ区々ノ別アレバ、各其一構社ヲ結ベルナリ。(傍線筆者。以下同)

秀成の意図を汲みながら、解説してみる。

最近、「太教新報」第五十六号の「社説」を読んで、日ごろの鬱憤が吹き飛んだ。なぜなら、本年(明治十四年)十二月十二日の「国会開設の勅諭」は、新しい時代を創る「行政上ノ針路」を示したものであり、その基本精神は「温故知新」である、と書いてあった。これは、明治五年宣布の「三条の教則」(一、敬神愛国ノ旨ヲ体スベキ事 一、天理人道ヲ明ニスベキ事 一、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムル事。以上、秀成著『教憲本拠』明治七年、東京書林・甘泉堂版による)の主旨とまったく一致する。したがって我々教導職は、「三条の教則」にもとづき、皇統の歴史と精神を学んでそれを国民に知らしめ、新しい国家・時代を創るべく尽力しなければならぬ。そのための大教宣布なのである。

しかし、神宮教院の教導職もしくは神道の中の一派は、大教宣布の任務に背を向け、勝手な行動をしている。国家とは大きな会社であり、国民のすべてが社員であるようなものだ。本年(明治十四年)十二月の「勅諭」を見ると、明治五年の大教宣布を説いた「勅諭」と何ら変わっていない。政府の方針は維新のときから一貫している。なのに、かれらは政府の方針に背を向け、勝手なことをしている。自分たちの別会社を創って、国民を誘い入れ、その運営に熱心になっているようなものだ。仏教やキリスト教ならばそういう活動は許されるが、神道は「三千五百万人」の国民を教育し、良き国家を創るための道を説き、その一員としての生き方を教

えるものだ。仏教やキリスト教のような宗教とは違うのである。およそ、こういうことを述べようとしている。

秀成は、神社神道への内部批判を込めて『大教本論』を書いたのである。自分の考えは正しい。なぜなら「三条の教則」はもとより、今年十二月の「国会開設の勅諭」とも合致するからだ。秀成の批判は、そう思うからいつそう鋭く激しくなった。

神社神道に対する批判——「幽世主義」と「顕世主義」

秀成は、何を批判したのだろうか。その部分を抜き出してみよう。アルファベットを振って示す。

A 今、我皇上、此遺烈ヲ顕揚シ、此洪模ヲ弘長シ、此模訓ヲ明徴シテ、朝野ノ臣民ニ公示スベシト詔リ玉ヘリ。応ニ知ルベシ、朝意ハ維新ノ初メヨリ今日ニ至ルマデ、断乎トシテ此針路ヲ変ジ玉ハザル事ヲ。

B 吾教職ノ諸君、孰レカ此徳を拝聴シテ、感奮振起セザル可ケンヤ。蓋、吾大教、維新ノ初メ、一タビ勃興セントシテ、而モ明治七、八年以来中撓シ、却テ萎靡能ハザルノ形勢ニ立至リシ所以ノ何ンゾヤ。

（以上、頭書）

C 或人問云。方今神道家ノ道ヲ講ズルヲ聴クニ、其説、区々ニシテ、一定セザルハ、イカゞ。答云。凡諸教ヲ觀ル時ハ、二義アリ。曰、顕世主義、曰、幽世主義、是ナリ。宗教ハ幽世主義ナルモノ、本教ハ顕世主義ナルモノナリ。何カニトナラバ、道ヲ講ズル、固ヨリ皇典ニ拠ラザルハナシ。

D 上流ノ教職ハ、廟堂ノ政略ニ疑惑ヲ生ジ、制外ニ屹立シテ、施政ト背馳セントシ、只管、教会信徒ニ向テ幽冥ヲ談ジ、国政ニ関セザラン事ヲ欲スルガタメニ、遂ニ一宗教ノ姿トナルヲ以テ、世ノ搢紳学士ニ

度外視セラレ、下流ノ教職ハ、徒ニ神明ノ不測ヲ奇貨トシ、愚夫愚婦ヲ瞞着シ、苟モ生活ヲ計ラント欲スルガタメニ、下等社会ニモ輕蔑セラル、ヲ以テノ故ナリ。

E 其下流ノ拙策ハ、甚ダ厭フベク憎ムベシト雖モ、固ヨリ卑賤ノ所業ナレバ、当路者、之ヲ禁ゼント欲セバ、速ニ停止スルヲ得可シ。且、上流ノ施設ニ至テハ、本斯レ学者ノ執見ヨリ起レルモノナレバ、最モ余輩、苦慮セザルヲ得ズ。

F 抑、我神道ハ、即皇道ニシテ、朝政ノ外ニ背馳ス可キモノニ非ズ。然ルヲ、上流ノ諸君、一時、朝廷ノ政略ニ疑惑ヲ生ジ、制外ニ立ント欲スルガタメニ、宗教ノ弊習ニ陷ントセシハ、豈大ナル謬リニ非ズヤ云々。此説、上流ノ教職ハ云々、下流ノ教職ハ云々説ニ至テハ、己ガ持論ノ符節ニ合セタルガ如シ。ほかにもあるが、これくらい引用すれば十分であらう。

Aは、国家の方針は明治維新より変更されていないという。日本固有の歴史・伝統を遵守し、それをもとに西欧の文明・政治をとりいれ、両者を総合・融和して新しい国家制度を建設しようという政治の基本方針である。

次のBは、「教職」（教導職）の人々はこの方針を聴いて「感奮振起」しない者はあるまい、と述べる。「大教」とはこの方針を実践するための教えをさす。つまり「三条の教則」の精神であるが、それを国民全体に広める大教宣布運動が明治七、八年から「中撓」（途中で挫けること）したという。その原因はどこにあるのかを厳しく問おうとしている。

Cは「大教」を衰頹させた原因をあげる。まず、「神道家」の説は各人各様で一定せず、その多くは「幽世主義」だという。「幽世主義」とは、あとで詳しく述べるが、神仙界や死後の世界を説く観点や学説をいう。秀成は、これを厳しく批判する。「宗教ハ幽世主義ナルモノ、本教ハ顕世主義ナルモノナリ」、これが秀成の持論で

あった。宗教は異界や死後のことを説くから「幽世主義」だが、「本教」（＝「大教」）は現実社会をより良く導くもので「顕世主義」の立場にたつ。だから、「宗教」ではない。神道は国家と国民の進むべき「道」を説くものである。

秀成はそうのように考えており、「幽世主義」と真つ向から対立することになった。神社神道は「宗教」に堕してしまつた、と厳しく批判したのである。

なぜそうなつたのか、Dに理由を述べる。「上流ノ教職」は、「廟堂ノ政略」に「疑惑」を呈して「制外ニ屹立」し、「施政」に背を向けている。「教会信徒」に「幽冥」を説くことに熱心で、「国政」に関与しない。「宗教」と同じ姿になり、官位の高い人や知識人たちから「度外視」されているのである。

「上流ノ教職」とは、神宮教院をはじめ全国の官弊社に属する教導職もしくはその一部の人々、と見て間違いない。また、「下流ノ教職」は、地方の神職で教導職を兼務する者であるが、かれらの中には「神明」の教義のわからにくさを良いことにして、玉占・口寄せ・託宣などをして「愚夫愚婦」の類を欺して金銭をとる者がいるが、「下等社会」でも「軽蔑」されているという。

国政と神道——教導職の任務

以上、秀成が何を嫌悪し何を批判したか、よく理解できる。あきらかに「上流ノ教職」に批判の矛先を向けている。次のEはこんなふうに述べる。「下流ノ教職」たちの行為はもとより「卑賤ノ所業」だから、為政者が禁ずればすぐに止めるだろう。だが、「上流ノ施設」は、見識の高い「学者ノ執見」によって創設されたもので、秀成も「苦慮」せざるを得ないのだという。「上流ノ施設」が何をさすか、秀成は発言していないが、お

のれの勤務する神宮教院であることは間違いないまい。

秀成は明治三年、神祇官の管轄する「宣教大講義生」に任用された。そして神祇省から教部省へ管轄が移り、さらに明治十年一月に教部省が廃止され、内務省の社寺局に事務が引き継がれ、『大教本論』を書いた翌年の明治十五年には官国弊社の神官は教導職を兼ねてはならないことになった。大教宣布運動をめぐる国策はめまぐるしく変更され、衰退を余儀なくされていたのである。

秀成の経歴をもう一度、整理しておこう。明治六年三月に大教院の講師長を任じられ、翌四月、キリスト教が浸透しつつあった函館に渡り、一年間、各地をまわって講説し、大教宣布に尽くした。翌八年十一月、伊勢神宮の禰宜を拝命したがすぐ辞表を提出し、大講義になった。神官は教導職を兼任できなくなり、教導職を選んだのである。翌九年五月、太政官より権少教正に補せられた。この間、ずっと東京に住んでいた。

だが、二年半ほどした明治十一年六月、大教院講師長を辞し、十二月末から伊勢神宮の教院に勤務し、三年あまりここで暮らした。しかし、明治十五年五月に辞表を出し、金刀比羅宮（香川県）に転居したのだった。東京在住期間を入れると、七年あまり神宮教院の「上級ノ教職」だったのである。

したがって、神宮を去る一年前、明治十四年六月の『大教本論』に述べた「上級ノ教職」に対する痛烈な批判は、長いこと同職にあった秀成の内部批判に相違ない。おそらく辞職を覚悟して書いたのであろう。「教職」（教導職）のなすべき任務、神道はいかにあるべきかをめぐって内部で対立し、孤立を深め、撤退するに至ったと思われる。跋文の「以上、述ル所ノ主意ハ、多年ノ持論ニシテ^{（一）}二神道管長ニ対シテ痛言陳述セシ事アレドモ、之ヲ容ラレザレバ」云々に、その間の事情が込められている。

さて、次のFに、秀成の神道観が要約されている。そもそも「我神道」とは「皇道」なのであって、「朝政」に「背馳」するものではない。「上流ノ教職」の任務は「朝政」に沿って国民を啓蒙することにある。ところが

「上流ノ諸君」は、あるときから「朝廷ノ政略」に「疑惑」を発し、「制外」に組織を立てた。そして「宗教ノ弊習」に陥ろうとしている。これは「大ナル謬り」ではないか、と痛撃している。

これは何を述べているのか。思いあたることは一つしかない。明治八年五月、教部省内に設置されていた大教院が廃止され（内務省社寺局に事務移管）、神官・僧侶の合同体制による大教宣布活動が中止された。それまでは神道側と仏教側がともに教導職を出して行なってきた。しかしこれを機に、神道側は伊勢神宮に事務局を置いて独自の教院を組織して団結を図った（『國史大辞典』、阪本健一の解説）。秀成が批判するのは、それ以降の状況である。教導職の任務を忘れ、国政に背を向け、死後・異界を説く宗教に陥っている、というのである。こうした批判が、伊勢神宮および神社神道側の実態をどれだけ正しく認識しているのか、実は明らかではない。神社神道の全体というより、その中の一部の人々に対する批判と思われる。しかし、内部にいた人間であるだけに、大きな誤りがあったとは思えない。秀成はBに、「明治七、八年以来中撓シ、却テ萎靡能ハザルノ形勢ニ立至リシ所以ノ何ンゾヤ」と述べ、大教宣布運動が挫折・衰頹した原因は神社神道側にあると批判したのである。

神道は宗教にあらず

それでは、どんな点が秀成のいう「宗教」なのだろうか。死後・異界を説くことをさすことは自明だが、詳しく検討してみよう。これも『大教本論』から引用する。

G 死後、靈魂ノ販着ヲ以テ本教ノ要旨トナスガ如キハ、^{すべからず}須、宗教ニ異ル事ナシ。基督教及ビ仏教等ノ、死後ノ苦楽靈魂ノ販着等ヲ要旨トスルハ、其教書ニ明文アルヲ以ナリ。我古典中ニ、靈魂帰着ニ確固タ

ル明文アルコトナシ。

H 若シ、自己ノ見解ニ頼リテ死後苦楽等ノ説ヲ以テ本教ノ要旨トシ、或ハ、一小怪事ヲ以テ神異ノ然ラシムル所トシテ、愚民ニ神明ヲ銜^光ラントシ、或ハ、一講社ヲ結びテ浮屠ノ所作ニ擬シナドスルハ、何ゾ宗教ト同日ノ論ヲ免レムヤ。

G は、死後の「靈魂」を行方を説くことは、「本教」（国家神道）の「本旨」ではないと述べる。キリスト教や仏教は「其教書」（聖書・經典）に「靈魂」の行方が書いてあるから教えるが、「我古典」（『古事記』『日本書紀』など）に記したものは無いという。

といえ、私たちは『古事記』『日本書紀』に記されたイザナギ・イザナミを思い浮かべるだろう。夫のイザナギが妻のイザナミを追いかけて死後の世界を訪問した黄泉国神話である。そこには、全身にウジ虫がたかり、身体の各所に恐ろしい雷神を抱えた死者の姿が描かれている。これに対して秀成は、次のようにいう。

或人、問云。我古典中、伊邪那岐ハ天ノ若宮ニ止リ給ヒ、伊邪那美ハ泉国^{ヨミツ}ニ到リ給フトアルハ、其明ナラズヤ。答云。此二神ノ故ヲ以テ、人、顯世ノ善惡ノ作業ニ因リテ死テ、其靈魂ノ天ト泉ニ皈着スル例ト見ンハ、誤ナリ。若シ然ラバ、伊邪那美命ハ惡業アリトセンカ。女神ニシテ言先キ立テ給ヒシヲ以テ、惡業トスルカ。此レハ、所謂、過失罪ナルノミ。天神ノ命ニ從テ、改メ給ヒシニヨリ、其罪消滅シタレバコソ、次ニ貴キ御子産レ給ヒシ古伝ハアルナレ。若シ、此レヲ泉墜^{ヨミニ}ル因^{ヨミニ}トスルトキハ、天神ハ過失罪ヲモ免シ給ハズ。悛改スルヲモ効ナシトスルカ。然ラバ、天神ハ慘刻ナル意トハ云ハザルヲ得ズ。

イザナミが黄泉国（死後の世界）に墜ちたではないか、という問いに対して、イザナミが「惡業」をなし、その「罪」ゆえに命を落とし「靈魂」が黄泉国へ帰着した、と考えるのは誤りだ、という。そうだとすれば、イザナミが火の神を産んで亡くなり、夫より前に死んだことが「惡業」になっってしまう。これは単なる「過失

罪」にすぎない。だから、「天神ノ命」により改めて「罪」が消えたあとも「貴キ御子」を産んだと記す「古伝」（不明）があるではないか。火の神を産んで死んだことが「罪」ならば、「天神」はみな罪障から逃れられないことになるが、それでいいのかと反論している。

「過失罪」という法律用語を使ったのは、秀成が西洋の刑法について深い学識をもっていたからである。明治十三年に『刑法図解』を著し、『大教本論』を書いた明治十四年には『刑法原理図解』、十五年に『刑法暗記便』『法律要目』を著した。十六年から『刑法図解』（十巻）の改訂を試み、十九年に清書を終えた。その間、『民事摘要』（明治十八年）をものしている。これらのうち『法律要目』は、半年に及ぶ山陰・東北の旅の途中に、京都・東京で西洋の法律書を買求め、それを熟読し要点を書き抜いて解説したものである。

『古事記』『日本書紀』の神話を、西洋の刑法に照らして考える視点をもっていたことは注意してよいだろう。かれの著作は、これらの史書や神話に関する研究のほかに、『古今和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』などの古典文学の注釈・研究がある。さらに、『大教本論』をはじめ、『民憲略疎』（明治二年）、『教憲本拠』（明治七年）、『政体経緯論』（明治十一年）などの法律書を出版している。ほかに随筆・歌集などがあり、九編の旅日記も遺されている。⁽⁸⁾有職故実や音義説などの国語学分野に関する著書も数多くあつて、この分野の著作が最もよく知られている。

秀成の学識は幅広く、ただ純粹に忠君愛国の皇国思想を主張したわけではないのである。述べたように、かれの見識・学問を支える根底には日本のほかに西洋の思想があつた。『大教本論』（『外国政教概略』）にも当時、入ってきたばかりのジャン・ジャック・ルソー（一七一二―七八）の学説に対する批判が記されている。西洋文化に関心をもち、よく研究していたのである。和洋折衷の時代ならではのことだった。

ルソーを批判するだけでなく、積極的にとりこもうとしたことも事実であつた。秀成の「神道は宗教にあら

ず」という主張は、おそらく次のようなルソーの言説に啓発されたものだろう。

社会との関係で考察すると、宗教は二つの種類に分類できる。すなわち人間の宗教と国家の宗教である。第一の人間の宗教には神殿もなく、祭壇もなく、儀式もない。ただ至高の神にたいする純粹に靈的な崇拜の方式と、道德の永遠の義務があるだけであり、これは純粹で素朴な福音の宗教であるか、眞の理神論である。第二の国家の宗教は、いわば一つの国だけに限定され、市民に固有の守護神を与える宗教である。独自の儀式と儀礼があり、法で定められた外的な崇拜の方式がある。

（中山元・訳『社会契約論／ジュネーブ草稿』光文社古典新訳文庫）

『社会契約論』の前段階というべき「ジュネーブ草稿」の第三編「国家法または政府の制度」に見える言説である。ルソーのいう一国内に限定され、国民に「固有の守護神を与える宗教」とは神道にはかならない。それは「独自の儀式と儀礼があり、法で定められた外的な崇拜の方式」をもつ国家を支えるための宗教である。ここでいう「外的」とは、伝統的社会風習として完成された儀礼・儀式のことだろう。ルソーはこうした「国家の宗教」を「古代のすべての人民の宗教」と考えているが、明治の国家神道は、その古代性を現代に復活・継承することによって国家の歴史的持続性の証しとしたのである。そのほかにも『社会契約論』を参照したと思われる箇所がかなり多く見いだせる。

且に移ろう。ここでは、神道側が人々に「死後（の）苦楽」を説き、それを「本教ノ本旨」のごとく教えることを批判する。また、不思議な出来事を「神異」のあらわれと教え、「神明」であるかのごとく説くことを批判する。このような活動を「講社」を結成して行なうのは「浮屠（仏事・僧侶）」と同じであり、「宗教」に変わりがないという。

それなら、神道はどうあるべきだと考えるのだろうか。くりかえしになるが、神道側が死後の世界や不思議

な出来事を国民に説くことを、極めて強い口調で批判・否定していた。それは「宗教」であり、神道ではない。秀成の考える神道は、天皇を奉戴する立憲君主制の国家のために、日本固有の歴史・伝統をふまえ、その本質をより正しく国民と世界に宣揚する為政の道なのであった。その根拠は、これもくりかえせば、明治五年の「三条の教則」である。「一、敬神愛国ノ朝旨ヲ体スベキ事 一、天理天道ヲ明ニスベキ事 三、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキ事」の本旨を、いかにして国民に弘めるか、それが大教宣布の「教職」（教導職）たる我々の任務なのに、神社神道側はこの本旨から逸れて、あたかもキリスト教や仏教のような宗教活動をするようになった、と慨嘆しているのである。

『秋田日記』から秀成の思想を見る

以上、明治十四年六月の『大教本論』について考察してきた。その背後には、明治八年以降の伊勢神宮もしくは神社神道に対する厳しい批判があることは明らかだ。秀成は神宮内で大教宣布のありかたで異見を抱き、管長に「持論」を「痛言陳述」したが、受け入れられなかった。『大教本論』はその「持論」を書き著したものである。だが、同書は刊行されなかったとおぼしい。自筆年譜の明治十四年条に、「病間、大教本論ヲ述ブ」とある。病気で筆が執れず、弟子に口述筆記をさせたとも考えられるが、自筆の『公私日記 明治十四年從一月至十二月』（学習院大学図書館蔵）を見ると、五月三十一日条に「今日ヨリ教義本論を少シツツカク」とあるのは『大教本論』のことだろう。六月五日条に「大教本論、清書ハジム」^⑧、以下、「大教本論ノ清書成ル」（九日）、「大教本論、再（び）清書ハジム」（十四日）、「大教本論清書、製本ニ遺ス」（十五日）、「大教本論、製本成ル」（十六日）と記されている（濁点・句読点・送り仮名を補った）。書名は変更したものの、書き上げるまでは四

日間もかからなかった。清書は二度おこない、これに十日もかけている。かなり綿密に執筆したことがわかる。秀成はこの年「早春ヨリ心臓病ニ罹り」、四月十六日に三重県伊勢市の寓居を出立し、京都の西京病院に行き治療を受けた（『都日記』にも詳述）。病気が回復してきたので執筆をし、心内に溜めていた「鬱情」（跋文）を発散したのである。

さて、日ごろの「鬱情」は、明治十五年七月から十二月まで山陰・東北を講説した長旅を書いた『秋田日記』にもうかがえる。金刀比羅宮を出て瀬戸内海を渡り、岡山から松江に行き、また岡山に戻って大阪、京都、東京に行き、白河関を越えて東北に入り、山形から日本海側へ抜け、本荘、秋田を通って能代まで行つた。

まず、同僚批判をあげよう。十月九日、秋田県男鹿市弘戸で、「風俗正しからざるは国乱る、始となるより、違警罪のことに及して」説き諭した。その翌日、土地の人々が礼儀を知らず「野蠻」であることをあげつらつて、次のように書きつけている。

かゝる所は、ことにをしへさすべきにはあれど、一たび二たびをしへたらんとて、かゝる獸心の人、いかでき、^④いれて改めんの心おこらんや。かゝる所は、いはゆる地方官、また学校の教育をもちて、漸に改（め）しむるにはしかじ。

かばかりなるあたりにものせんより、かの中等以上の人どもの、やゝもすれば吾国体を乱す^{クニガラ}説を立（て）、君をなみし官をあはむる人おほき所に力をつくしてもすべきわざなるを、おのれらが同じ職^{ツカサ}の人の見る所はことなりて、たゞ老翁^{オウナ}、老女など、すべて下等の人をつどへてものせんとするは、そのこゝろ、おのれにはまきまへがたうなん。

かのをぢ、おうなの類、世にいふ棺^{ヒツキ}に片足かけたるものゝ、何事をしいだして御国の為となり、又、御国をそこなふことなしえむや。こはき兵^{ツハモノ}をして冑^{カブト}ぬがしめば弱きもの必くだるは、いにしへよりの常なる

ものをや。

自分と同じ「教職」にある者たちは、「棺に片足をかけた」老人たちを集めて講説することに熱心であるが、自分には理解できない。今や民権運動が各地で勃発し、国体を変革し、天皇を侮り、政府を軽く見る者たちが多い。そういう土地にこそ「教職」を派遣すべきではないか、と率直に疑問を述べている。明治六年の函館宣布を想起しているのだろう。

大教宣布は国家をあげての取り組みであったが、大きな成果をあげることもなく衰退の一途をたどり、二年後の明治十七年について廃止されてしまう。そういう末期的状況の中を山陰から東北をまわり、村人たちに講説をして歩いた。それは「しるしもあらぬはかなき業」（十月二十四日、秋田県三種町芦崎）であった。同僚たちは現状を見ることをせず、いまだに「獸心」「下等」の人々を集めて講説すればよいと思っている。怒りはしだいに熱を帯び、罪のない村人たちをいたぶる激しい言葉を連発する。

現状を知らない「おのれらが同じ職ツカサの人」とは、神道側の教導職に対する批判だ。『大教本論』に述べた批判は翌十五年の『秋田日記』にも息づいているのである。五月末、伊勢神宮を去り金刀比羅宮に移ったから、もつと自由に批判できる立場にあった。さらに、民間に流布する「俗神道」に対する批判も、『秋田日記』に確認できる。秋田からの帰途、十一月二十三日、箱根で昼食を摂り三島の宿に着いて人力車に乗り換えた。そこで次のような光景を目にした。

不尽浅間宮の分霊とかいふもののでますとて、幡あまたで、からびつ（＝御輿のこと）めくものかつぎ、はふりら（＝神官たち）おほく駕籠にのり、車にもものしてねりわたるに逢ふ。かゝるよしなきこと、近き頃のはやりものにて、いはゆる神明をてらひありくというわざにて、その道の為なげかはしくおぼゆ。

富士浅間神社のお祭りであろう。お神輿行列の光景である。神官たちが駕籠や馬車にたくさん乗っているの

を見て、「神明をてらひありく」所業であり、「道の為なげかはしくおほゆ」という。神を祀るかのように見えるが、神の道にもとる行為だと非難する。『大教本論』では「愚民ニ神明ヲ銜^元ラン」とするもので「幻売神道」（「本教ハ宗教ニアラザルノ論」）と呼んでいる（H）。明治の国家神道は、こうした民俗行事までも「俗神道」と称して切り捨てた。新しい国教と法制度を定め、西洋の民権思想にも応じうる日本版〈立憲君主国家〉を創ろうとしたのだった。明治の神道は、そういう政治的意図のもとに、日本の歴史・伝統の中からその本質・本来のものを汲み上げて言説化・組織化しようとしたものである。

秀成は『秋田日記』の旅の中で、地元の人々に二回ほど「俗神道」について語った。「俗神道の弊を弁駁するの説をかう^{（講説）}ぜちす」（九月十四日、秋田県由利本荘市町口）、「午後三時よりかうぜちをはじめて、俗神道に欺れまじき旨をさとす」（十月十六日、秋田県男鹿市双六）。このとき富士浅間神社のお祭りを見たことに触れたであろうか。「俗神道に欺かれまじき」とあるから、玉占・口寄せ・託宣・悪霊のお祓いの類は非科学的なものであり、神道ではないと力説したに違いない。長く続いた神仏習合の風習の中で、地方の神職や修験者およびかれらに従う盲人の巫女には、その種の営みをして暮らす者が多かった^{（9）}。

俗神道を否定し、死後の世界を教えるキリスト教・仏教の類とは異なるというからには、人の死についての明確な思想が必要だろう。『秋田日記』の十月三日の条に、次のような興味深い記述が見える。

八橋の里に公園あり。こゝに近き頃、平田篤胤翁を祭りたる社ありといふ。おのれは今はいさゝか見るところありて、大方、学風を改めぬれど、わかゝりし時は、此翁の著（さ）れたる書によりて、古へのころ知りたる事もおほく、今こそあれ、一たびめぐみかうぶりたるを、けふは拝みゆかん、とかねてはおもひしかども、雨風つよく駕籠よりいづることのたやすからねば、ほいならねどたゞに打すぐ。

平田篤胤（一七七六―一八四三）に対する、そっけない態度は何であろう。篤胤は秋田藩の出身である。か

れを祀る弥高神社の近くを通ったが、雨風も激しいので駕籠に乗ったまま通り過ぎた。しばらく秋田市に滞在したのに、どこにも参詣したとは書いていない。

若いころ篤胤の著作を読んで、古代の人々の心を学んだ。しかし、「今はいさ、か見るところありて、学風を改め」たという。そっけないのは、篤胤の幽冥界・神仙界に関する思想を批判的に見るようになったからだろう。篤胤の著作は『古道大意』『古史伝』『歌道大意』などとともに、『靈能真柱』『仙境異聞』『勝五郎再生記聞』のような異界の存在を証明する著書が五十代から増えてくる。幽冥・神仙の世界がたしかに存在し、人間の住む現実の世界に対し様々な影響を与えていると考えた。「顕幽一如」の思想である。

こういう「怪事」を「神明」のごとく見なすことを秀成は嫌悪した。自筆年譜を見ると、「宣教大講義生」になった明治三年に「神魂演義、神魂俗論等、命ヲウケテ著ス」とある。これらの書物は現存しないが、篤胤の影響のもとに書かれたものだろう。以後、このようなタイトルの書物は書かれない。五十二歳のころまで篤胤に親炙し、その後はしだいに遠ざかったのである。

篤胤はたしかに明治維新を導く原動力を与えたが、秀成はあるときから篤胤を座視するようになった。¹⁰『秋田日記』の一文は、そのことを如実に物語っている。反対に篤胤の幽冥観・死生観を受け継ぎ、教導職の任務として人々に説いていたのが、神宮教院に所属する神官たちであったものではあるまいか。もちろん出雲大社に所属する神官たちは死後、霊界に降下したスサノヲミコトとその子孫のオホクニヌシノミコトを葦原中国を創った神々として信仰していた。したがって、かれらは人々に向かって人間は死して幽界に行くと言ったことはいうまでもない。そして神宮教院の教導職の中にも、幽冥主義に同調する者たちが数多くいたのではなかったか。伊勢神宮はアマテラスオホカミを祀ることはいうまでもなく、伊勢派と出雲派は対立関係にあったが、平田篤胤らの影響を受けて出雲派に同調する者がかかなり混じっていたと考えられる（参照・原武史『出雲』と

いう思想』一九九六年、公人社→講談社学術文庫）。秀成が神社神道を「宗教」にほかならぬと強く非難したのはそういうことであつた。両者にはこの点においても鋭い対立があつたことがうかがえる。

このように見てくると、山陰・東北へ行く途中の八月十八日、箱根の湯本（神奈川県）で乗った馬車の中で、偶然に末広重恭（鉄腸。一八四九～九六）と出会い、激しい議論を戦わせた理由もわかつてくる。

こゝ（＝藤沢）を馬車にてたつ。名ある新聞記者、末広重恭とのり会せたり。かれがいはいゆる主義は、おのが立つるところと、かの反対論者といふものなれば、車のうへにていたくろうじた、^{（戦）}かひて、いひはつべくもあらぬほどに、思はず藤沢のすくに^{（宿）}着きて、ひるげすとしてわかれたり。なほ同じ車にのらばと思ひをりけるに、かれ人力車にかへぬれば、おのれも二人引の車にものして、いそぎにいそがせつ、午後三時頃、神奈川につく。

湯本から藤沢まで直線距離で約四十キロ。神奈川（現・横浜市）まではあと約二十キロある。秀成はいつも朝早く出立するから、乗合馬車で出会つて藤沢まで三時間は議論をしたのだろうか。「いたく論じ戦ひて」、終わりそうになつた。昼食後また議論しようと思つて馬車に戻つたら、重恭は一人引の人力車に乗り換えて去つたあとだつた。秀成の剣幕に辟易して逃げたのだろう。秀成は二人引きの人力車を見つけて追いかけた。すさまじいばかりの執念である。よほど激しく言い争つたに違いない。

秀成もいうように、末広重恭は著名な新聞記者で、自由民権論者として知られていた。「朝野新聞」の編集長を務め、明治十四年にイギリス留学から帰つた馬場辰猪（一八五〇～八八）らとともに「国友会」を結成し、ついで一緒に「自由党」の創設に参画したが間もなく脱退し、明治十六年には馬場らと「独立党」を結成した。また、『雪中梅』（明治十九年）、『花間鶯』（同二十年）の政治小説でも知られている。明治憲法が發布された明治二十三年に総選挙に出馬して当選、「立憲自由党」を結成したが、翌年に脱党した。秀成と遭遇したのは明治

十五年の夏、「自由党」創設のころにあたる。

重恭に、どのような議論を挑んだのであろうか。神道は「宗教」ではなく、国家を運営するためのものだというのが秀成の主張であった。それは天皇を奉戴して神世から続いてきた日本の歴史・伝統そのものであり、その本質としての思想・哲学・情操・倫理の類である。これを端的にまとめたのが「三条の教則」であるというのが秀成の立場であり、明治の国家はそれを土台に西洋の文明・制度をとりいれ、両者の総合のもとに西欧諸国と同じような立憲君主国家を創ろうとしている。秀成は、天皇にも国民と同様の信仰の自由があると考えた。しかし天皇は古代より神を敬愛し、人民を愛撫し、国を治めてきたのだから、こうした国体はこれからもずっと持続するのであって変更はありえないという^⑩。

秀成は、愛国的な神道思想によってこそ西洋諸国に比肩しうる国家、すなわち日本固有の歴史・伝統を継承する国家を建設することができると確信していた。それゆえに国民の教育に勤しみ民度を高めなければならないと考えた。終生、教導職として全国をまわり、人々に日本の歴史、思想、法律、天皇、愛国、殖産興業などについて講説したのはそのためであったのである。

秀成の愛国思想からすれば、国民こそ国家の主体であるという末広重恭らの民権思想は、日本的なるものを軽視し消滅へ向かわせる危険性があると感じられたであろう。そして、国民のすべてに自由民権を与える前に、社会の上層部・知識層に与え、かれらの指導・薰陶によって民衆のレベルを底上げしてゆく行くことこそ先決問題だ、と説いたであろう。なぜなら、『大教本論』には「上流ノ諸君」「上流ノ教職」「上流ノ施設」とあり、「下流ノ教職」「下級ノ拙策」「下等社会」と明確に区別している。「上流」が「下流」を導くべし、「下流」は「上流」を見習うべし、というのが秀成の考えである。皇道・伝統・歴史にもとづく上からの改革か、大衆・自由・権利の下からの改革か、重恭との議論はこの問題で白熱したに違いない。これと似た議論は今も私たち

の近くで行なわれているのではなからうか。

『秋田日記』十月五日の条に、「今朝は、きのふ佐々木綱方が問へるに答（え）置（き）し、今の世に俗神道とさす所のもの、又、神式葬儀のことを委しく書きて遺す」（秋田市土崎港）とある。佐々木綱方は秀成に随行した金刀比羅宮の神官であり、弟子といつてよい。秀成が「俗神道」と「神式葬儀」について、手紙に「委しく書きて遺」わしたという。俗神道の実態についてはすでに述べた。「神式葬儀」については、秀成はどのようなことを書いたのだろうか。人は死んで、どこへ行くと考えていたのか。神上がりますことはわかるが、具体的にどのような言説を述べたのか。残念ながら、これについて記す適切な資料が見いだせない。しばらくは不明とするほかはない。

おわりに

堀秀成の研究は、まことに少ない。しかもそれらの中には、秀成の同僚であつた常世長胤（一八三二―一八六）の談話を門人が書き留めた『神教組織物語』¹¹に見える次の文言を引用して、秀成の実像を思い描くといったものが多い。

堀氏ハ稚キ時ヨリ身持悪キ為、古河藩ヲ脱シタル後ハ、軍談ナドヲセシ人ナレバ、講義ハナレテ上手ナリ。脱藩の理由は身持ちが悪かったからだという。秀成が生涯に四度も結婚したことに対する揶揄も含んでいる。こういう噂が大教院の中で広まっていたのかもしれない。はたして秀成は身持ちが悪くて古河藩を脱けだしたのか。自筆年譜によれば、実の母親が死亡したあと父は後妻を娶った。やがて後妻との間に産まれた三歳下の弟に家督を譲らざるを得なくなり、古河藩を去つたというのが真相に近いといふべきだろう。

その後は、請われるままに全国各地を赴き、書道の教師をしたり国学を教えて糊口を凌いだ。信濃国（長野県）における生活の一齣を、「二月の残りの雪のかつ／＼なる小川のせり（＝芹）など摘みもて来て、いひのあはせもの（＝ご飯のおかず）にはするなり」（随筆「貧窮行」、高木武編『文学錦囊』明治四二年一二月、文成社）と綴っているが、そのとおりの貧窮ぶりだったろう。家督を弟に譲って家郷を出たものの、妻子を養うことができなかった。それゆえまた妻子と離れて独り各地を渡り歩き、塾生を募っては生活費を稼ぐ、ということとをくりかえしたようだ。三度の離婚はどうもそれが原因であつたらしい。軍談はかれの弁舌の才能を磨いてくれたが、実際は身過ぎ世過ぎのアルバイトであつたろう。

秀成は軍談をしていたから講説がうまかった、と長胤というが、それだけで「宣教大講義生」に任用されたわけではあるまい。秀成の自筆年譜を見ると、明治二年六月「建言書ヲ待詔局ニ出ス」とある。三十一歳のときの『助辞音義考』以来、著書はすでに三十冊を数え、すでに下野国皇学校（藩校の一種）教示の職を得ていた。講説のうまさもさることながら、それらが認められて「宣教大講義生」に任用されたと考えるべきだろう。

秀成の膨大な著作の基礎は、長年の貧窮生活の中で蓄積されたものだった。五十九歳のとき最後の妻、岡田文子を得るが、二人の愛情のこまやかさは『秋田日記』や二人の歌集から窺える。産まれて間もない子どもの死も一回ならず体験した。前妻たちとの子どもは、嫁がせたり養子縁組させたり心を碎いている。身持ちの悪い男であつたとは一概には思えない。常世長胤が門人に語った秀成評は、同じ職場にあつたライバルの厳しすぎる悪口というべきだろう。秀成は十歳ほど年上で、当初は出世も早く、活躍が目立っていた。いつの世も職場には癖の悪いひがみ者がいて、仲間を増やし、一人をめがけて悪口しあうのである。そのように受けとるのがよいだろう。¹⁸⁾

秀成は、明治・大正期、全国に名の知れた神道家であり国学者であつた。自筆年譜に記された門人数は生涯

で二千四百一人にのぼる。その中には、近代文学において有名な落合直文（一八六一―一九〇三）もいた。秀成は忠君愛国の皇道思想のために（とはいえ、天皇に「信仰の自由」を認めるなど、西洋民権思想との協調路線をめざしたのだが）戦後はまったく無視され、すっかり忘れ去られてしまった。それもやむを得ないが、堀秀成を通して曲折と激動に満ちた明治日本の歩みが見えてくる。秀成はすでに五十歳を越えていたが、青雲の志を抱いて明治政府の教導職となった。しかし、時代の荒波に揺さぶられ、挫折・落魄の境遇へ追いやられていった。それでも晩年まで遠方の地に足を運び、民衆に講説をし、教導職の使命を果たした。早すぎる時代の流れはいうまでもない。見識の高さと狷介な性格、何よりも持論の神道思想を枉げずに生きたことが挫折・落魄の原因となった（享年六十八）。

注

- （1）筆者は、堀秀成に関して以下の論文を発表している。「伝播する和歌」『和歌の力』和歌をひらく・第一巻、二〇〇五年一〇月、岩波書店、「旅人・堀秀成の発見」『日文研』四〇号、二〇〇八年三月、国際日本文化研究センター）、「旅人の発見——堀秀成の『秋田日記』」『説話論集』第一七集、二〇〇八年五月、「堀秀成の東北旅行」『朱』第五二号、二〇〇九年三月発行予定、伏見稲荷大社）。

なお、本文の考察に引用した「秋田日記」の翻刻・解説は、『和歌の思想・言説と東北地方における芸能文書との影響・交流についての研究——和歌における〈外部〉とは何か——』（二〇〇八年三月、萌芽研究報告書、研究代表・錦仁、私家版）に掲載した。

- （2）「秋田日記」明治十五年九月十二日、秋田県由利本荘市の旅館で、かつての同僚の福羽美静の揮毫した和歌の掛軸があるのを見て、落魄の思いを連ねている。「いにし頃、此人、神祇官の大副にてありし時は、日くあひて、こと

にしたしかりし人にて、そのかみの事、その頃のわが身のうへの、世に人がましくありしことなどしのびいでらる。
／末かけてさかゆく人の世にありて身のむかしのみなどかこひしき／吾ひとり、美静が歌にはうらうへなるがかなしきことなる。美静の人生と裏腹な境遇になったと嘆いている。

- (3) 「秋田日記」九月二日、福島県から米沢県に越える栗子峠の茶屋で、この新しい道路がかつて同僚であった三島通庸が造ったことにふれて、次のように述べている。「このはり道は、おのが教部省にありける頃、親しくものせし三島通庸が山形県令なりし時、民の力を協せしめてものしたる所なり」。また立ち寄った茶屋で三島の揮毫した「楽山」という額があるのを見て、昔のことを思いだし、道路建設の功績をたたえる長歌を詠んで三島に贈っている。

- (4) 以上の伝記は堀秀成の自筆年譜『琴舎年譜 完』（古河市立古河歴史博物館蔵。写本）による。竪三・六・八×横一九・二cm。黄色の表紙、題箋に「琴舎年譜 完」と筆記。本文料紙、鳥の子。内題も「琴舎年譜 完」。墨付本文、全一九丁。巻末に遊紙一丁。序文に、「（前略）此一巻は我が生れし年より以来の年次の大略を子孫に示さむとせしるしぬ／明治十四年一月一日 秀成」とある。跋文は、明治二十一年十一月以降、「門人記ス」とある。秀成の自筆と門人の筆が混じっている。序文は門人の筆。年譜部分は五十三歳まで秀成の自筆、以後は門人の筆と見られる。

- (5) 武市勇「伊勢の琴舎秀成——近代日本の動乱期を生き抜いた放浪の言霊学者」（『最後の国学者 堀秀成』一九九〇年一月、堀秀成顕彰会編、八幡書店）。自筆年譜の明治十五年に、「六月五日、讃岐琴平二着ス。同所ノ招ニ応ジテナリ」とある。深見速雄の生没年は、金刀比羅宮秘書課の村中氏のご教示による。

- (6) 秀成の国家神道論の特色および独自性は、天皇にも信仰の自由がある、と説くことである。しかしそれは、神ながらの道（国体）の確立を妨げるものではないという。もう一つは、神道は「宗教」ではない、と説くことである。この問題については本稿でも論じるが、(1)の拙論「堀秀成の東北旅行」に詳しく論じた。日本の固有性と西洋の民権思想との融合・協調の上に、天皇を奉戴する日本型（立憲君主制国家）の建設を考えたのである。

- (7) 草稿本と清書本の『函館日記』が遺されている。

- (8) 拙論「旅人の発見——堀秀成の「秋田日記」」（『説話論集』第一七集、二〇〇八年五月）などに詳しく述べた。

- (9) 『稲川町史』資料集・第八集（昭和四十七年三月、秋田県雄勝郡稲川町教育委員会、七一―七二頁）に、明治政府の教部省が出した文書が引載されており、国家神道が地方に浸透した経緯がうかがえる。句読点等を打って引用す

る。

神下シ・口寄ノ事

西域諸国ニハ靈物ニ託シテ不思議ノ術ヲ顯シ、信ヲ愚民ニ取ルノ術アリト云フ。神下シ、玉占、口寄せ等モ此類ナラン。其利害ハ施術者ノ心術。学識ノ高卑、如何ニアルカ。当地方ハ、近世、神下シ、口寄せ等ヲ為スモノ、皆、盲女ニシテ天台宗ニ属セリ。何レモ無学・無識、其心術、卑劣ニシテ有害ナルハ、普ク卓識者ノ論破スル所ナリシガ、明治六年一月ニ至リ、教部省ヨリ地方官ニ取締方ヲ達ラル其文ニ、

従来、梓巫〔女〕欠・市子、並ニ湯心・祈禱・狐下ゲ抔ト相唱、玉占・口寄せ等ヲ所業ニテ、人民ヲ眩惑セシメ候儀、自今、一切被禁止候条、於地方官、此旨相心得管下、取締方、嚴重ニ可被相立候事。

明治六年一月

教部省

この後に、この地域では古い因習をにわかに改めることができず、「天台宗盲僧祈禱所」という表札を掲げて従事する者がまだであると記し、佐藤マツ、佐藤セン、佐藤ソヨの人妻（盲人）をあげている。ともに玉占と口寄せを業としていた。また、嘉左衛門という「真言秘密ノ法」を習得した男をあげている。この男は「切支丹ノ妖術」を習得していたとも伝えられているという。

また、「稲庭卜筮者ノ事」（八九〜九〇頁）ニハ、「当地方ノ占術ハ多ク筮トヲ主トス。稀ニ、擲錢法ニ依ルモノアルモ、之ヲ信ズル者寡シ。（中略）只、阿部忠起、佐藤信敏ノ二人、太昊ノ古易ニ依レリ。然レド、忠起ハ人ノ為メニ筮セズ。信敏モ亦多クハ身ノ上、病人、待人等ヲ筮スレドモ、盜難・失物等ヲ占フヲ好マズ」とある。佐藤信敏について少し説明を加えると、かれは明治期の神官で郷土史についても研究業績を遺した（拙論「秋田県南部の伝承新資料〈翻刻と考察〉——目連・慈覚・小町に関するもの八種」平成二年二月、『秋田大学教育学部研究紀要』〈人文科学・社会科学第四一集〉参照）。さらに興味深いのは、高橋正記についての記述である。「本郡三梨村ノ人。稲庭ニ移リ住ス。蛭子神社ノ神職ナリ。時人、恵比寿大夫ト称ス。後、黒住教教導職トナル。易占ニ長ゼリ。七十余才ニシテ没ス」とある。かれは「黒住教」の「教導職」であった。「教導職」は国民教化運動が始まった当初、神職のみならず僧侶や各教団からも選ばれて任務にあたった。明治八年に真宗側の反対により合同体制が廃止されたので、神社側は独自の体制を組織し、独自に教導職を育成して国民教化の活動をするようになった。

(10)

常世長胤『神教組織物語』の明治三年三月二十九日の条に、「常陸人少講義宮本宣胤、内意ニ依テ辭職シタリ、是平田門ニテ小野氏ノ嫌ヘル人ナリ」とある。小野述信（一八二四―一九一〇）が、平田篤胤（一七七六―一八四三）を祖とし鉄胤（一八〇一―一八二二）から延胤へと続いている平田門を嫌っていたことがわかる。というより、延胤のもとに集まる人々を嫌っていたと思われる。また、同年八月、平田門の中に、「夜見国」の存在を信じる篤胤以来の学説に異論を唱える人々が、延胤（一八二八―七二）の私宅において「怠状」（詫び状）を提出するという出来事が起きた。署名・捺印をした六名の中に常世長胤も入っていた。この事件は大教院の中に広まったようで、延胤は「本官兼官」（神祇官と宣教師の役職）を解かれ、長胤も大講義生から「宣教師出仕大講義心得」に格下げされた。長胤は、処分の背後には福羽美静と小野述信の権力行使があったと見ていたことは、「神祇官ハ福羽美静ノ心ノ儘トナリ、宣教師ハ小野述信ノ儘トナリ、官使ノ滅亡近キニアラント、人皆サ、ヤキシナリ」からわかる。そして、「大抵因循ノ徒ノミ跡ニ残レリ」と述べている。篤胤の学説は明治の初年に早くも影響力を喪いつつあったようだ。

このようなことを勘案すると、長胤が秀成を「稚キ時ヨリ身持悪キ」男と悪口した背景には何かあったように感じられる。秀成が福羽美静・小野述信と親しい関係にあり、かつ篤胤の思想・学説から離れたからではなからうか。大教院内部の権力闘争および思想的イニシアチブの奪い合いがあり、秀成は福羽・小野側に付いて、しかも篤胤を尊敬しなくなった。それゆえに長胤は怨嗟の情を抱き批判したのではなからうか。

なお、秀成の最初の妻は、憲政の確立に尽力したことで有名な尾崎行雄（一八五八―一九五四）の叔母である。嘉永四年（一八五二）、秀成三十二歳。藤次郎、生まれる。二番目の妻は、弟子の落合直亮の妹。万延元年（一八六〇）、秀成四十一歳。直亮は、落合直文の養父である。三番目の妻は、直亮の妹と離婚後、芦野氏の娘、延子を妾とし後妻に改めた。元治元年（一八六四）、秀成四十五歳。藤四郎秀行、米子、稲子、穎子、生まれる。四番目の妻は、岡田文子（綾子とも）。明治十一年、秀成五十九歳。谷子（二歳で死亡）、巖（四十三日で死亡）、琴子。三番目の妻、芦野延子との離婚は明治十九年であった。

なお、二番目の妻は、秀成の弟子の妹ということで結婚したのであろう。離婚の理由は、直亮が篤胤の幽冥思想を強く受けて改めず、一方、秀成が篤胤の影響を脱して幽冥主義を捨てたことによるか。親戚関係を結んだが、思想を違えるようになり、それがもとで離婚したのかもしれない。

- (11) 『神教組織物語』は、宇野正人「常世長胤講述門人等筆記『神教組織物語』」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第五二輯、一九八三年九月）に翻刻・考察がある。
- (12) (1) にあげた拙論「堀秀成の東北旅行」に詳しく述べた。
- (13) 秀成に対する悪口の理由は、(10) に述べた。

【翻 刻】

凡 例

原文をそのまま復元することに努めたが、旧字体は通行の字体に改めた。
明らかな誤字は正字に改めた。

本文を翻刻したあとに、頭書を各丁ごと二字下げにして翻刻した。

本文、頭書とも、改行の箇所／を付け、丁の末尾に「」を付けた。

本文中の引用を示す「」は、『で示した。

「」は、割注の書込みを示す。

() は、翻刻者の注記。右脇に付した(ママ)は原文のままであることを示す。

【書誌】

竪三一・〇×横二二・五cm。仮綴じ。楮紙を二折、全二二丁（表紙・裏表紙を含む）。表紙のやや左寄りに直接、「大教本論」と筆記。昭和十一年の書写。原本は現存しない。

大教本論（表紙）

本年十月堀先生ノ五十年祭が小林大僧正ノ發起にて古河ノ史蹟保存会ニヨリテ嚴修セラレシ折先生ノ著書數十部ノ各所ヨリ集メラレタ中ニ複写ヲ要スルモノ多クアツタ余ハノ神籙考ト大教本篇ヲ複写ヲ千賀会長ヨリ依頼ノセラレ喜ンテ之ヲ応諾ス

昭和十一年十一月秋日ノ万年青舎主ノ奈良東皐老人印ノ行年七十二歳

大教本論

目次

外国政教ノ概略

皇国政教ノ概略

本教ハ宗教ニアラザル論

大教本論

堀 秀成述

外国政教概略

本教ノ一大基礎ヲ論スルニ当ツテ先ツノ外国ノ国家ト教法家ノ関係ヨリ陳ノフ可シ然ルハ本教ト外教ハ其原因ノヲ大ニ異ニスル者ナル事ヲ先ツ云ハノ為メナリノ外国太古草昧ノ世ノ政体ニハ何レノ国ニ論ナク人世ノ事ハ総テ一神ノ及ヒ数神ノ管理ニ帰スル者ナリトノ思量セシカ故ニ国家ノ理其法制等ノニ至ルマデ一モ此心根ニ基資セザノル者ハアラサリキ此時ニ当テ各国各個ノ神ヲ尊敬スル事猶各国各個ノノ制度憲法ヲ遵用スルガ如ク而シノテ他国ニ於テ尊敬スル所ノ神ニ至ラハ敢テ之ヲ尊敬スルノ意ナカリノキ加之各国共ニ一定ノ規律アリテノ其国神ヲ尊敬スルヲ以テ臣民ノ義

此太古ノ形状一涉リハ人心篤ノキニ依ルモノニ似タリト雖モ猶ノ野蛮ノ風習ヲ脱セズシテ或ハ鳥獸或ハ異ナル偶

像ヲ祭り甚シキ／ニ至リテハギリシヤ人ハ惡逆ヲ許シ奸邪ヲ信愛スル神アリトシテ之／ヲ祭りボルネシヤ人ハ死人ノ魂／魄ヲ食フ神アリトシテ之ヲ／信シタル類アリ」

務トナシ而テ若シ之ヲ尊敬セザル／者アル時ハ則チ之ヲ國ノ威權ヲ瀆／辱スル大罪人トシテ刑ニ処シタリ／キ／羅馬ノ侵略ヲ被リケル各国ニ於テ／ハ其威力ニ強迫セラレテ皆羅馬ノ／神ヲ尊敬セザル可カラザル事トナ／レリ去レ共敢テ其國固有ノ神ヲ廢／除スルヲ要セズ併テ共ニ之ヲ尊敬セリ」

基督ノ世ニ出ルニ及テ此旨意ヲ變／革セリ此ノ基督ノ伝ヘケル道ハ嘗／テ猶太國ニ於テ其政府ヨリ布施セ／シ道トハ全ク異ニシテ基督ハ國教／ノ道士トナラズ／基督自カラ天神ノ子ナリト称シ眞／ニ天神ノ己レヲ現世界ニ派遣セシ／メタル由ヲ以テ國家ノ管轄ヲ受ケ／ズ當時國家ノ意思ニ背テ起立セシ／者ナレバ大ニ國家ノ為ニ侮辱セラ」

基督ノ自己ノ新教ヲ興／サンガタメニ古來ノ教法ヲ排／撃セル意ハ仏祖御主ノ古／教バラモン教ヲ破壊シタル意ニ同ジ／基督自カラ天神ノ子／ナリト云フモノハ仏祖ノ法華／經ヲ説キテ我ハ久遠ノ如來／ナリト云ヒシ意ナリ」

レ遂ニ驅逐セラレシニ至リシナリ／然レ共此教ニ歸依セシ門徒ノ心志／ヲ深く感化シテ大ニ区域ヲ拡メタ／リ／基督ハ猶太國ノ神ヲ誹議スルノ大／罪アリトシテ遂ニ死刑ニ処セラレ／タリ然レ共其徒弟等益國教ヲ排撃／シ靈魂永遠滅セザル理ヲ信シ之ニ／安ンジテ遂ニ現世ノ生命ヲ失ヘル／モノ巨多ナリ」

此教ヲ奉ル者ニ大原則ヲ遵奉セリ／其第一原則ハ此道ハ元來國家ノ創／立セル所ニアラザルガ故ニ決シテ／國家ノ管轄ニ属ス可キモノニアラ／ズ／第二原則ハ道ハ一個人ヲシテ天神ノ／心靈ヲ悟ラシメ而シテ永遠不滅／ノ人魂ヲシテ天神ト合一ナラシム／ルモノナリ／又陰原則ト云フモノヲ設ケテ一般」

此条殊ニ本教ト反セリ／意ヲ注テ見ル可シ」(注・キリスト教を國家の管轄外とする第一原則に對して)

ニ遵奉ス此陰原則ハ國家ノ管理ヲ／拒防スルヲ主トス故ニ陰原則ト云／フナリ／此道ハ國家ノ准許ヲ得テ始メテ立／シニアラズ故ニ敢テ國家ノ制馭ニ／就ク者ニアラズトシテ遂ニ國家却／テ此道ヲ遵信敬仰シテ其教旨ニ恭／順スル事トナレリ／人ノ天神ヲ信スルノ心ハ總テ其精／神心意ニ係リテ全ク人世ノ法ニ関」

國家ニ反シ又法則ヲ遵守／セズ他教ヲ敵視シ十字軍／百四十年ノ戰爭ノ種子此ニアリ／又魯帝ベートルノ遺言ヲ他／國ヲ蚕食スベシ必蘇法ヲ以テ／其國人ノ心ヲ取テ後謀ル可シ／ト云ヒシモ此陰原則アルヲ／以テ國家ヲ尊敬

セズ却テ拒スルノ／人心ヲ醸ス意アレバナリ我徒ノ／者時教類似ノ見アラバ此ノ轍ヲ／踏ムノ想アリ謹ンテアル
ベカ／ラス」

セズ及ヒ国家ノ管理ニ係リタル者ノナラズ蓋シ国家其権力ヲ人ノ思ノ量意見上ニ施行ス可キ者ニアラザ／ルノ理ヲ知ル
時ハ心神ノ／國權ニ／属ス可カラザルノ理モ亦瞭然タリ／トシテ人世法ノ束縛ヲ受ク可キ者ノニアラズ此天神ノ人ノ靈
魂ニ賦与／スル所ノ自由ノ理ナリト云説漸々／ニ蔓延セリ／国家ハ一個人ニ強迫シテ其信ゼザ／ル教派ニ従ハシムルノ
權ナシ然ル／ニ中古基督教漸ク蔓延スル時ニ於テハ未タ嘗テ此理ヲ知ラザリシガ／故世ニ伝播スル方法甚暴戾慘刻ニ
／シテ若シ服従セザル者アル時ハ直／チ二兵ヲ用キ火ヲ放チ之ニ逼リ強／テ此教ニ従ハシムルヲ常トセリ／太古ヨリ近
世ニ至ル迄人皆此道ヲ／以テ帝國国家法制ノ為メニ最要の基礎タル者ト為スノミナラズ国家ハ」

決シテ此道ヲ離ル、能ハザル者ト／為セリ羅馬國太古偶像教ヲ奉シタル時ニ方リ緊要ノ政務ハ必ス神意ノヲ窺ヒ其准
許ヲ願フノ後ニアラザ／レバ決シテ之ヲ施行スル事アラザ／リキ後世歐羅巴ニ於テモ国家必ズ／自ラ基督教ヲ奉セザル
可カラズト／規定セリ／然ルニ近世始メテ政教一致ヲ全ク／破壊セント欲スル論起リテヨリ國」

家ハ敢テ自ラ此道ヲ奉ジ此道ヲ要／セズト云フ論ニ至レリ／凡ソ国家ハ元來諸權利を保護スル／ガ為メニ結ビタル社会
ナレバ基督／教ト他教トノ差別ナク總テ保護ノ／術ヲ尽スベキコト当然ナリ去レ共／ルウソウノ論ノ如ク国家其憲法ヲ
以／テ自ラ此道ノ原ヲ確立スルヲ好ト／為スハ大ナル謬見ナリ国家若シ如／此キ処分アラバ遂ニ自ラ患害ヲ／招」

外教ハ其本國家治國ノ道ヨリ／出デザレバ此論アリ我本教ニ反セリ／西洋ニテモ上古ハ政教ヲ一トス／ローマノ
法律ハ其原ヲ教法ニトレリ今ヲ去ル事七八十年ノ魂近教ト法ト其源ヲ異ニスル／コトヲ命明セリヨリ政教ハ二ニ
途ナルモノトス（意味不明な箇所が多い。そのまま翻刻した）

クニ至ル必然ナリ且教ト法トハ元／來相合シ難ク又幽界ニ於テ天神ト人ノノ靈魂ト相交関スル理モ亦顯界ノ／國家法制
ト全ク相合シ難キ者ナルニ／強テ之ヲ相合併セント欲スルハ謬／見ノ甚シキ者ト云フベシ／國家ト教會トヲ以テ相分別
シ全ク／政教ヲ二途トスルハ凡各國近時ノ／通制トナレリ獨リ此道ニ惑溺セル信／者若クハ空理ニ心酔セル學者ニア」
ラザレバ決シテ此直理ヲ以テ非ト／スル者ナシ実ニ方今開化ノ大ニ進／歩セシト自由權の隆盛ナルトヲ得シ／ハ殊ニ此
直理ノ實地ニ行ハレシ／ニ由ルナリ「説ハ政教規則及ビ國法汎論等ニ拠テ其ノ大要ヲ云フ」／

此ニ掲ケタル主意ト同一ニ出ル／モノハ悉ク我本教ノ要旨ニ背馳／スルモノナリ外教ト本教ハ其因テ起ル所大ニ別ア

ル故ナリ次ニ／挙ル本教ノ要旨ト照ラシテ其然
ル所以ヲ知ル可シ／

皇国政教概略

我本教ハ 天皇治国ノ道ニシテ上件掲ル／所ノ外国ノ教法トハ其原因ニ於テ／霄壤ノ別アリ本教ノ基ハ造化天神／ニ興
リ元祖之ヲ皇孫ニ伝ヘ曆朝相／承ケ天職ヲ以テ国ヲ治メ給フモノ／則我大道ナリ此他ニ道ト称スルモ」

ノアル事ナシ皇極天皇ノ御記ニ順／考古道為政トアリ元祖ノ伝フル所／曆朝相承ノ大典則古道ナル事此ヲ／以テ明瞭
タリ然レバ管贈太政大臣ノ遺誠ニ凡治天下君因ニ准シ先王之法／則太古之伝和而治之ニ矧又（いはんやまた）神孫
之皇／国也トアルモ其意ナリ／人民ヲシテ之ニ依ラシムルガ則本／教ナルコトハ崇神天皇十年七月ノ／詔ハ朝憲ヲ四
方ノ国ニ布宣セラル」

ル時ノ詔ナルニ其詔詞ニ曰導民之／本在於教化也云々其選群卿遺于四／方令知朕憲トアルニ導民之本在於
／教化ト係リタルヲ令知朕憲ト受ケ／テ前後ノ語照応シタル意アリ此ヲ／以テ憲ヲ知ラ令ルガ教化ナルコト／著名
タリ然レバ教ハ国憲ヲ論シテ／之ニ依ラシムルヨリ他事アルコト／ナシ今ヤ中興ノ時天子商時制宜ノ權變ヲ以テ旧弊ヲ
退ケ日新開化ニ」

朕力憲トアルハ其御代／ニ設ケラレタル憲ノ意ニハ／アラズ朕相承スル所ノ憲ト／云フ意ナリ所謂万古不易ノ
大典ヲ指シ玉ヘルナリ／官位令義解今謂教令／也教以法政令其不相違越／繼世紀二十四年令人挙廉
節宣揚大道流／通鴻化」

至ラシメムト万機改革アリト雖モ／大政ノ基本ニ至リテハ猶不易ノ大／典ニ從テ天職ヲ治メ給フ事ハ明治／二年六月十
一日ノ詔書ニ皇祖ノ遺／典ニ基キ人情時勢ノ宜ニ適シ云々／トアルヲ以テ明カナリ又同年五月／二十一日ノ令ニ我皇国
天神天祖極／ヲ立基ヲ開キ給ヒシヨリ列聖相承／ケ天工ニ代リ天職ヲ治メ祭政徑一／上下同心治教上ニ明ニシテ風俗
下」

ニ美ク皇道照々万国ニ卓越ストア／ルヲモ合セテ政權ノ大本ヲ知ル可シ／上件陳ル如ク皇道ハ天祖立極ノ大／典ナルヲ
之ヲ説キテ万民ヲシテ之／ニ因リテ政教ハ一致ナルモノニテ／外国ノ教法トハ大ニ異ナルモノナ／リ／

本教ハ宗教ニアラザル論／

本教ハ皇政ノ理由ヲ説明シ人民ヲシ」

嵯峨天皇弘仁二年二月二十日／ノ詔ニ曰心蜜設^レ教爲政之要／挹云々桓武天皇延暦十二年／六月詔ニ曰觀^レ時施^レ教有^レ國之／尋範云々此等ノ詔詞ハ殊ニ政ノ教不二ノ確証ナリ」（前節に対する頭書）

テ制令ニ遵ハ令ムルノ他ニ國教ト／稱スルモノアラズ國教ノ要旨此ニ／アルヲ以テ政教ハ二途ナラザル事ノ論ヲ待ス然ルヲ死後靈魂ノ販着ヲ／以テ本教ノ要旨トナスガ如キハ須ノ宗教ニ異ル事ナシ基督教及ヒ仏教ノ等ノ死後ノ苦樂靈魂ノ販着等ヲ要ノ旨トスルハ其教書ニ明文アルヲ以／ナリ我古典中ニ靈魂帰着ニ確固タル明文アルコトナシ而シテ之ヲ要」

或人問云今ヤ政治ノ術大小ノトナク皆西洋ノ制ヲ取ラレテ／古制ヲ廢サル然ルヲ本教ハ唯皇政ノ理由ヲ説明スルヲ／本教ノ要旨トナサバ古ニ則トルノ大道トスル事イカバ／答云政治ノ大本ハ所謂万古ノ不易ニシテ天地ト共ニ不動ノ大典ノナリ又洋制ヲ取ツテ我有ト云フノ事多カルモ悉ク其意古道ニ／悖ラザル理アリ已ニ著シタル／政體經緯論ニ詳ニ弁シタ／リ見テ而シテ後猶疑アラ／バ再ビ問フ可シ」

旨トスル者ハ宗教ニ疑似スルモノト云／ハザルヲ得ズ／或人問云我古典中伊邪那岐命ハ天ノノ若宮ニ止リ給ヒ伊邪那美命ハ泉^{ヨミ}ノ國ニ到リ給フトアルハ其明ナラ／ズヤ答云此ニ神ノ故ヲ以テ人顯世ノノ善惡ノ作業ニ因リテ死テ其靈魂ノノ天ト泉ニ販着スル例ト見ンハ誤ノナリ若シ然ラバ伊邪那美命ハ惡業ノアリトセンカ女神ニシテ言先キ立^{マデ}テ」

給ヒシヲ以テ惡業トスルカ此レハ所ノ謂過失罪ナルノミ天神ノ命ニ從テ／改メ給ヒシニヨリ其罪消滅シタレバ／コソ次ニ貴キ御子産レ給ヒシ古伝／ハアルナレ若シ此レヲ泉墜^{ヨミ}ル因^{ヨミ}トスルトキハ天神ハ過失罪ヲモ免シ／給ハズ悔改スルヲモ効ナシトスル／カ然ラバ天神ハ慘刻ナル意ト云ハ／ザルヲ得ズ／方今開明ノ各國ニハ教会ヲ度外ニ」

措テ敢テ省ミズ唯國家自ラ教会ト／ノ關係ヲ止メ而シテ如何ナル教派ノト雖モ人民ノ意ニ任セテ奉教ノ自ノ由ヲ与フルヲ以テ制トスル事ハ已／ニ云ヘルガ如シ今ヤ皇國ノ制モ宗ノ教ニ於ケルハ之二異ナル事ナシ本ノ教ハ大政ヲ講ル道ナレバ奉教自由ノ二關係スルモノナラズ何ニトナラ／バ皇國人民トシテ一人モ皇制遵奉ノノ上ニ自由ノ權アル可キ理アラサ」

レバナリ／三条教則ノ第一条ニ敬神愛國トアルハ各國各教トモニ其神ト指スモ／ノハ異ナリト雖モ敬神ヲ云ハザル／

教派モナク愛國ヲ專要トセザル國／モノク第二条ニ天理人道云々トア／ルモ之ヲ明カニスルハ諸教ノ常ナル／モノナリ
 独其第三条ノ皇上奉戴朝／旨遵守ノ一条ニ至リテハ各宗ノ教旨／ト本教ト大ニ異ルモノアリ何カ

ニナラバ各宗ニハ各其依経ト称ス／ルモノアリテ其極意ニ因テ宗旨／ヲ建立シ其宗流ニ從テ無上至尊ト／奉斎スルモノ
 アリ其奉斎ノ本尊ヨ／リ他ニ崇敬スル者ナク朝旨ヲ遵守／セシムルガ如キハ菅政府ニ対／スル義務ノ一点ニ止ルノミ我
 本教ハ無／上至尊ト恭敬スル者ハ皇上ヲ措テ／他ニアル事ナク専ラ拡充セントス／ル者ハ皇政ヨリ他ニアル事ナシ然レ
 レバ本教ハ此第三条ヲ主旨トスル／道ト云フ可キノミ此レ本教ト各教ト／大ニ異ル所ニシテ本教ノ宗教ニア／ラザル所
 以ナリ／若シ自己ノ見解ニ頼リテ死後苦楽／等ノ説ヲ以テ本教ノ要旨トシ或ハ／一小怪事ヲ以テ神異ノ然ラシムル／
 所トシテ愚民ニ神明ヲ街ラントシ／或ハ一講社ヲ結ヒテ浮屠ノ所作ニ／擬シナドスルハ何ソ宗教ト同日ノ

秀成才識譏 劣学問空疎／ナリト雖モ本教ノタメ愁嘆スル／事余アリ而シテ秀成ト所見ヲ／同ウスル者甚ダ希少
 ナルヲ恨メリ／然ルニ近日太教新報第五十六／号ノ社説ヲ讀ミテ始メテ愁眉／ヲ開クノ感アリ其説ニ曰ク本ノ年
 十月十二日ノ勅諭ニ至テハ／煥然トシテ行政上ノ針路ヲ指的シ／温故知新ノ旨赴ヲ明示シ玉ヘルニ／於テヤ其
 旨宛モ宣布大教ノ／勅書ト前後照応シ玉ヘル如シ／其勅諭ニ曰ク我祖我宗照臨シテ上ニア／リ遺烈ヲ揚ケ洪模ヲ
 弘メ云々宜ク／今ニ及ンデ謨訓ヲ明教シ朝野臣／民ニ公示スベシ云々ト夫レ我ガ皇

論ヲ免レムヤ／商社其他ノ会社ハ共立ノ為メニ設立／スルモノニテ一社ヲ結ビテ事業ヲ／謀ルモノナルヲ我大道ハ皇國
 三千／五百万人ヲ一社会トセルモノニテ／別ニ一社ヲ結ベルハ一派自立ノ主／意アルモノニ似タリ國家ノ制令ヲ／講ル
 ニ何ンゾ一社会アル可キ理ア／ランヤ宗教ニ於ルハ其ノ教方ニ区々／ノ別アレバ各其一構社ヲ結ヘルナリ

室祖宗洪謨遺烈ナルモノハ／此豈三神造化ノ德ニ靈修／成ノ功日祖照旨ノ余烈ニ非ズシ／テ何ンゾヤ且夫レ歷世
 ノ謨訓ナル／者許多アル中ニ其最モ著キ者／ハ天壤無窮ニ踰タルハ無カル可シ／今我皇上此遺烈ヲ顯揚シ／此洪
 模ヲ弘張シ此模訓ヲ／明徴シテ朝野ノ臣民ニ公示ス／ベシト詔リ玉ヘリ此ニ知ルベシ／朝意ハ維新ノ初メヨリ今
 日／ニ至ルマデ断乎トシテ此針路ヲ變シ玉ハサル事ヲ吾教職ノ／諸君孰レカ此德を拝聴シ／テ感奮振起セザル可
 ケンヤ蓋／シ吾大教維新ノ初メ一タビ／勃興セントシテ而モ明治七八／年以来中撓シ却テ萎靡能ハザルノ形勢ニ
 立至リシ所以ノ何ンゾヤ

或人間云方今神道家ノ道ヲ講スル／ヲ聴クニ其説区々ニシテ一定セザ／ルハイカッ答云凡諸教ヲ觀ル時ハ／二義アリ曰

顕世主義曰幽世主義是ノナリ宗教ハ幽世主義ナルモノ本教ノハ顕世主義ナルモノナリ何カニトノナラバ道ヲ講スル固ヨリ皇典ニ拠ラザルハナシ然ルニ皇典ハ皇統ヲノ記載シタルモノニテ偶々枝葉ニ渉

是他ナシ上流ノ教職ハ廟堂ノ政略ニ疑惑ヲ生シ制外ニ屹立シテ施政ト背馳セントシ只管ノ教会信徒ニ向テ幽冥ヲ談ジ国ノ政ニ関セザラン事ヲ欲スルガタメニ遂ニ一宗教ノ姿トナルヲ以テ世ノ摺ノ紳学士ニ度外視セラレ下流ノ教職ハ徒ニ神明ノ不測ヲ奇ノ貨トシ愚夫愚婦ヲ瞞着シノ苟モ生活ヲ計ラント欲スルカノタメニ下等社会ニモ輕蔑セラルヲ以テノ故ナリ其下流ノ拙策ハ甚タ厭フベク憎ムベシト雖モ固ヨリ卑賤ノ所業ナレバ当路者之ヲ禁セント欲セハ速ニ停止スルヲ得可シ且上流ノ施設ニ至テハ本斯レ学者ノ執見ヨリ起レルモノナレバ最モ余輩

リテ幽事ヲ記載シタル所ナキニアラザレトモ旨ト皇統ヲ記載スル事ノ実ノ運ビニ依テ自カラ幽事ニ及ビタルモノニテ固ヨリ幽事ヲ主トシテ記載為タルニアラス抑皇統ハ顯ノ世ヲ知食ベキ事ト神世ヨリ定レルノモノナレバ皇統ノ顯世ニ関スル事ノ勿論ナリ是以テ皇道ヲ説明スルニ皇典ニ拠ル以上ハ本教ハ顕世主義ニアラザルヲ得ズ然ルニ本教ノ講

苦慮セザルヲ得ス抑我神ノ道ハ即皇道ニシテ朝政ノ外ノニ背馳ス可キモノニ非ズ然ルヲ上流ノ諸君一時朝廷ノ政ノ略ニ疑惑ヲ生シ制外ニ立ントノ欲スルガタメニ宗教ノ弊習ノニ陷ントセシハ豈大ナル謬リノニ非ズヤ云々此説上流ノ教ノ職ハ云々下流ノ教職ハ云々ノ説ニ至テハ己ガ持論ノ符ノ節ニ合セタルガ如シ

説ニ幽世主義ノ見解ヲ以テ説明スルモノアリテ宗教ノ説ト大同小異トナルアリ如此其大本ヲ取違フヨリ区々ノ説ヲ為スニ至レルナリノ或人問云人民ヲシテ制令ヲ遵守セシムル者則本教ノ要旨ナルハ然ルノ可シト雖モ然ラハ敬神ハ本教ノ要旨ニアラザルカ答云皇政ノ最第一ノナルモノハ則敬神ナル事已ニ掲ケタル詔詞ニ天工ニ代リ天職ヲ治メ祭礼維一上下同心云々トアルヲ以テ知ル可シ又明治三年正月三日ノ詔詞ニハ太祖創業崇敬神明愛撫蒼生ノ祭政一致所由来遠云々トアリ又維新ノ際群臣ニ勅スルニ朕躬ヲ以テ衆ノ二先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯国是ヲ定メ万民保全ノ道ヲ立ントストアリ国是ヲ定メ給フニ先ツ神明ニ誓ヒ給フヲ初トス今ヤ宮中儀式ノ始メノ二元始祭ノ御親祭アリ政始メニ万機

奏上ニ先キ立テ先ツ神宮ノ事ヲ奏シ其他ノ神宮及ヒ官国幣社ヲ崇敬セラルナノト枚挙ニ遑ラズ此皇政ノ最要タルモノノ

ハ敬神ニアル事ノ確証ナリ抑祭ノ政維一ナルモノハ天孫降臨ノ時天ノ祖ノ神勅ニ因ルモノニテ本教ハ皇ノ政を講スルモノト云フ時ハ敬神ハ其第一義ニ具備スルモノナリ然レ共ノ銜売神道者流ノ云フ所ハ真ハ敬神ノナラシヲ却テ本教ノ障礙ヲナ」

領曆ニ官幣社ノ祭日ヲ表ノサレタルモ民ニ農事ヲ知ラスルノ節時ト共ニ必ラズ遙拝ノス可キタメニ記載セラレタルヲ以テモ敬神ト農事ハ国ノ大本ナルヲ悟ルベシノ戊辰十月十七日詔書ニ「崇神祇重祭祀皇ノ国一大典政教ノ基本ノ云々」

セリ真ノ敬神ナラズンバアル可カラズノ近時本教宣布者ノ教会等ノ処分ノヲ見聞スルニ外教所立ノ教会ニ擬スル者尠カラズ思フニ彼ノ伝導師ノ能ク愚民ノ心意ヲ固結セシムルニ擬スルヲ便捷ナリト見ル所ニ出ルモノナラム然レドモ我本教ト宗教ノト大ニ性質ヲ異ニスレバ彼ガ方法ノニ倣フ時ハ遂ニ宗教ヲ免ル、事能ハ」

ザルノ弊ヲ来タリシ事必セリ我本教ノヲ人民ニ論ス者ハ古明法道ノ博士ノヲ四方ニ派遣セラレテ新令ヲ講説ノセシメラレタル時其当任者ノ見識ノニ倣ハンニハ及ジ一派ノ弘法者ニ比シテ見アランハ我本教ハ永クノ宗教ノ範圍ヲ出ル事能ハジ畢竟我ノ教導者政教ヲニ途ナルモノト謬見ノスルヨリ自ラ宗教ニ混同スルノ弊ノヲ醸スコトアリ宗教ト大ニ異ナル」

所以ハ国体ニ從テ政体ノアル所ト本教ノ真面目ヲ知り得ル時ハ忽チノ氷解ス可シノ国体ニ從テ政体所立ノ論ハ已ニ著セル政体經緯論ニ述ベタレバ今之ノニ再論セズノ

以上述ル所ノ主意ハ秀成多年ノ持論ニシテ嚮ニ神道管長ニ対シノテ痛言陳述セシ事アレドモ之ヲ容ラレザレバ思布事伊波伝乃」

山尔住加迦武門乃真清水汲牟人母奈之」ト詠ジテ爾後黙シテ云ハノズ唯同志ノ談話ニ蓄憤ヲ漏スコトノアルノミナリシヲ近日故有テ其ナノ中ノ二三ヲ筆端ニ露セルニ至テ少シクノ鬱情ヲ慰ムノ快アリ文辭ノ鄙ニシノテ且不整ナルヲ咎ムル事ナク聊意ノアル所ヲ看ラレム事ヲ

明治十四年六月」

世の中によしとよく見る人ならば／よくとおもふこといはてやまめや

秀成

あはれこの道ぞまことの道なるを／よしとよく見ぬ人やなに人

正臣

昭和十一年十一月下旬於古河町

奈良喜三郎氏写之

〔注〕

以下、参考のため、本文中に引用された詔書をあげる。詔書（詔勅）の項目は、森清人編『詔勅虔攻』（昭和一七年三月、慶文堂書店）、書き下し文は、辻善之助監修『歴代詔勅集』（昭和一三年一月、目黒書店）による。漢字は現行の書体に直した。

〔皇国政要概略〕

（1）「崇神天皇十年七月ノ詔」は、以下をさす。

崇神天皇 教化を四方に布くの詔（十年七月廿四日／日本書紀五）

民を導くの本は、教化に在り。今既に神祇を礼ひ、災害源耗きぬ。然るに遠流の人等、猶正朔を受けず、是れ未だ王化に習はざるのみ。其れ群卿を選びて、四方に遣し、朕が意を知らしめよ。（「意」は一本「憲」に作る）

（2）「明治二年六月十一日ノ詔書」は、年月日が間違っている。秀成は記憶によって書いたか。

明治天皇 公議所を開き會議を親裁し給ふの詔（明治二年二月二十五日／太政官日誌二年二六）

朕、將二東臨、公卿群牧ヲ会合シ、博ク衆議ヲ諮詢シ、国家治安ノ大基ヲ建ントス。抑制度律令ハ、政治ノ本、億

兆ノ頼トコロ、以テ輕シク定ムヘカラス。今ヤ公議所法則、略既ニ定ルト奏ス。宜シク速ニ開局シ、局中礼法ヲ貴ヒ、協和ヲ旨トシ、心ヲ公平ニ存シ、議ヲ精確ニ期シ、専ラ皇祖ノ遺典ニ基キ、人情時勢ノ宜ニ適シ、先後緩急ノ分ヲ審ニシ、順次ニ細議シ、以テ聞セヨ。朕、親シク之ヲ裁決セン。

- (3) 「同年五月二十一日ノ令」も、左記と同様、年月日が間違っている。これも記憶によって書いたからだろうか。真相は不明である。

明治天皇 かみみかろ 維神の大道を宣揚するの詔 (明治三年正月三日 / 太政官日誌一)

朕、恭しく惟みるに、天神・天祖、極に立ち統を垂れ、列皇相承け、之を継ぎ之を述ぶ。祭政一致、億兆同心、治教上に明かにして、風俗下に美し。而るに中世以降、時に汗隆有り、道に踴晦有り。今や天運循環し、百度維れ新なり。宜しく治教を明かにして、以て惟神の大道を宣揚すべきなり。因つて新に宣教使を命じ、天下に布教せしむ。汝群臣衆庶、其れ斯の旨を体せよ。

「本教八宗教ニアラザル論」

- (4) 「嵯峨天皇弘仁二年二月二十四日ノ詔」および「桓武天皇延暦十二年六月詔」は、『日本後紀』はもとより『詔勅虔攻』『歴代詔勅集』にも確認することができない。何か典拠があるか、記憶によるかは不明。

- (5) 「本年十月十二日ノ勅諭」は、以下をさす。

明治天皇 国会開設の勅諭 (明治十四年十月十二日 / 三條實美公年譜)

朕、祖宗二千五百有余年ノ鴻緒ヲ嗣キ、中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ、大政ノ統一ヲ総攬シ、又夙ニ立憲ノ政体ヲ建テ、後世、子孫繼クヘキノ業ヲ為サンコトヲ期ス。嚮ニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ、十一年ニ府県会ヲ開カシム。此レ皆漸次基ヲ創メ、序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非サルハ莫シ。爾有衆、亦朕カ心ヲ諒トセン。

顧ニルニ、立国ノ体、国各宜キヲ殊ニス。非常ノ事業、実ニ輕挙ニ便ナラス。我祖我宗、照臨シテ上ニ在リ。遺烈ヲ揚ケ、洪模ヲ弘メ、古今ヲ變通シ、断シテ之ヲ行フ。責朕カ躬ニ在リ。將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ、国会ヲ開キ、以テ朕カ初志ヲ成サントス。今在廷臣僚ニ命シ、仮スニ時日ヲ以テシ、経画ノ責ニ当ラシム。其組織権限ニ至テハ、朕、親ラ衷ヲ裁シ、時ニ及テ公布スル所アラントス。朕惟フニ、人心進ムニ偏シテ、时会速ナルヲ競フ。浮言相動カシ、竟ニ大計ヲ遺ル。是レ宜シク、今ニ及テ謨訓ヲ明徴シ、以テ朝野臣民ニ公示スヘシ。若仍ホ

故サラニ躁急ヲ争ヒ、事変ヲ煽シ、国安ヲ害スル者アラハ、処スルニ国典ヲ以テスヘシ。特ニ茲ニ言明シ、爾有衆ニ諭ス。

（6）「明治三年正月三日ノ詔詞」は、以下をさす。

明治天皇 神祇・皇靈を鎮祭し孝敬を申べ給ふの詔（明治三年正月三日／太政官日誌一）

朕、恭しく惟みるに、大祖の業を創むるや、神明を崇敬し、蒼生を愛撫す。祭政一致、由来する所遠し。朕、寡弱を以て、夙に聖緒を承け、日夜慌惕して、天職の或は虧けむことを懼る。乃ち祇みて天神・地祇・八神暨および列皇の神靈を、神祇官に鎮祭し、以て孝敬を申ぶ。庶幾はくは、億兆をして矜式する所有らしめむことを。

なお、巻末に記された、秀成の歌に応和した「あはれこの道ぞまことのみちなるをよしとよく見ぬ人や何人」の作者「正臣」は、坂正臣（一八五五～一九三二）のことだろうと思われる。かれは宮内省御歌所の歌人で、「敷島艦行進曲」などの作詞者としても知られている。このころ秀成と親しかったと見える。